

太田 道子 氏
(NGO「地に平和」代表)

暴力とは何か

—見たこと、学んだことから考える—

I. はじめに—自己紹介と活動紹介

私を紹介した人は、厚樹ちゃんという人です。ここだと、空閑先生とか言わなきゃならないのだろうけれども。属する「家」の名前で呼ぶと個人とは考えられませんから、その人だけの名前で呼ぼうと。何もアメリカのまねなんかをして、メアリーとかトーマスとか言っているのではないのです。そうじゃなくて、日本は個人より家柄のほうが大事な国ですから、家の名前を使わないようにしましょうということで、厚樹さんとか道子さんとかいうふうにしております。

「先生」というのも、先に生まれたということだけのことで、言ってもしょうがない。先生という途端に壁ができるし、道子さん、厚樹君、政昭君でやりましょうということで、そういうふうにしております。

私は珍しくも原稿を作ってきたのです。普段、私たちは小さな5～10人ぐらいの勉強会しかしませんので、どこの誰か分からない人がどっと前に座っているという状況だとちょっと話がしにくい。知り合っている人が一つのテキストを真ん中に、誰がいるか分かって勉強会をするということで、「地に平和」は勉強会をします。たくさんの方がいると誰の顔を見て話したらいいのか分からなくなるから、ちょっと難しいなと思って原稿を作りましたが、あまり使わずに話します。

「地に平和」というのはNGOですが、それを20年ぐらい前に老後の務めみたいな感じで起こして、それ以来しているのですが、その紹介から始めます。どういう運動かという、NGOと聞いた途端に外国に支援活動に行くというふうにも思いませんか。そうではなくて、NGOとは非政府組織というだけのことですから、政府じゃなくて自分たちでやるという組織で、何をやったって本当はいいわけですね。

私たちがしていることは、自転車の両輪とか、二輪車の両輪のように、二つの車があります。どちらが欠けても私たちの運動は成り立たない。一つの輪は、現

代国際社会を悩ませている問題をちゃんと勉強しましょうということと、もう一つの輪は、机上の空論はダメだから、勉強したら実行したいから、この世界には出掛けて行って助けたいところはものすごくたくさんあって選択は非常に大変だけれども、勉強していることにできるだけ近いことをしようと思いました。たまたま私の学問の専門が古代オリエント学ですから、どうしても紀元前3000年に人間の文明が始まってから、今日までの5000年間の勉強となる。その中で何を資料にするかという、紀元前500～200年ぐらいに成立した、古代オリエント大文明圏の結論みたいな書物があり、これは人間学の大変な教科書で、世界に冠たる大著があります。残念ながら旧約聖書などという名前が付けられているために、人は棚の上ののっけておいてまともに読まない本です。人間学の書ないしは歴史書と言ってもいいそれを使って紀元前3000年、人間が字を書いて記録を取るということ始めて以来、今日までの5000年間の問題を考えるという勉強です。

そうすると、どうしても資料が資料ですから、この資料から出てきて現在の国際社会を牛耳っているのはユダヤ-キリスト教、問題はユダヤ-キリスト教およびそれに影響を受けて出てきたイスラム、この三つが三つどもえで世界中に混乱をもたらしている、いわば中東紛争に関わるために何らかの仕事をしに出掛けるのがいいのではないかということになりました。

中東の紛争、特にイスラエル-アラブ、というよりユダヤ人対アラブ人のパレスティナ紛争の最大の犠牲者は誰かという、パレスティナ系アラブ人です。その人たちが押し込められて60年以上経つという難民キャンプ、小さい地域に50ぐらいの難民キャンプがあり何百万人という難民がいる。その一つ、皆さんも聞いたことがあるでしょう、ベツレヘムという町にある難民キャンプを選んで、そこで100人の女性にわずかな小さな仕事を与えて、子どもにパンを食べさせることができるようにするというプロジェクトをしているのです。

それと勉強。どうしても両方ないと運動は両立しなくて、どっちかだけしたいという人は「地に平和」の会員としてはちょっと片足で立っているようなことになりますから徐々にやめて行き、今は両方の価値を認める数百人で続けています。

大夢賀君とか厚樹君とかは例外的に若い人たちです。20年ぐらい前にはまだ厚樹君は留学から帰ってきて、坊やだったときに事務局へきて手伝ったときから知っているわけです。その中で育ってきて、今やここの准教授になっているわけです。この運動の主体となった人々は、20年前にすでに定年退職年齢だったものですから、今や中心的なメンバーは80歳前後ということになってしまっていて、私も81歳6カ月という状態です。これは皆さんには想像がつかないかもしれないけれども、非常にしんどいことで、ヒーヒー言いながらやっと思っているのですから、あそこで何か大きい人が元気そうにしゃべっているけれども大丈夫だろう、と乱暴に扱わないようにしていただきたいと思います。

II. 語を問い直す大切さ

さて、ここはコミュニティ福祉学部というところですね。「地に平和」の会員には本学部の教員であった現文学部在籍の佐藤研さんがいます。彼ももう今年度で定年退職ですから、時間はどんどん経っていきます。その他にも、コミュニティ福祉学部には、「地に平和」の若者会で育った人が何人もいて、そのために私自身は立教大学には関係がないのですけれども、何となく親しみがある上に、空閑厚樹君と大冨賀政昭君が話しに来てはどうかと言うと、断れないという心理もありますね、仲間ですから。それで引き受けたのです。年次学会に何をするかと言ったら、「コミュニティ福祉って何」というテーマだというのでびっくりして、「あなたたちコミュニティ福祉っていう学部じゃないの、なのになんでそれをするの」と言ったら、また叱られちゃったと言いました。

暴力のない社会から幸せに向けてという副題も、私にはとてもそんな話はできないと思うようなものでしたね。暴力のない社会なんて言えるというのは、暴力ということをもとに考えていないからじゃないか。「地に平和」というところはお互いがミガミ言っても平気なところですから言ったのです。そうしたら厚樹君が、「うん、そういうことを言いに来たらいいのだ」と言ったので、それを話します。

「暴力のない社会」などというのは形容矛盾というか、そんなものが可能だなどと思っているならまず、第一に言いますが、暴力とは「命あるもの」の存在の根源、それに必然的にあるものです。命がある限り暴力が必然的にあるということを考えてから、それから「暴力のない社会」とどうしても言いたいのなら、そのときの暴力という語は、その根源的な暴力が発現したもの、すなわち単品として一つ一つの形を持って発現したものとして考えるとでも説明しなければなりません。

ここは学問の場「大学」ですから、その単品の、例えばセクハラだとか、ドメスティックバイオレンスだとかという単品の暴力を追い掛けて、それをどのように操作してなくする方法についての資格を取ろうとかいうことではなくて（それもやったらいいと思いますが）、命あること自体に暴力が含まれるとはどういうことか、なぜそれが発現するかを研究する、それが大学という場所で第一になされるべきだと言おうと思ったのです。

最初チラシを見て疑問に思ったことがたくさんあったのですけれども、「暴力」とか「社会」とか「幸せ」とかいう、それぞれの語は、それぞれ単独で用いればどの分野にも共通の意味が見えるとは思うのです。けれども、他の語や句と一緒に一連のフレーズ（成句）を作ると、その幾つかの語の連なりが作ったフレーズの意味に限定されて、暴力とか社会とか幸せとかいう語が形を変えます。合言葉、

例えば、「暴力のない社会から幸せに向けて」というような、合言葉を作るのであれば、まず一つ一つの語句をこの学部で通常定義しているところに鑑みてしっかり考えてから、例えば私みたいに外部から来る人間でも、誤解しないようなフレーズに、しっかり組み立てる必要があると思いますね。「暴力のない社会から幸せに向けて」っていうのは、いささか無理があるというか、いささか幼い感じがするフレーズだと思います。いきなりこういうきついことを言うと、しんどくなるかもしれないとは思っただけでも、それでも皆さんに会おうと思って喜んで来たのです。

暴力のない社会なんて言われると、すぐ何をイメージしたかということ、アメリカに gated community というのがあるのですね。それを皆さんが、そんなものを作ろうと思っていないでしょうね、とは思いましたが、「暴力のない社会から幸せに向けて」なんていうと、この立教大学コミュニティ福祉学部以外の、普通に考える人間が直ちに思うのは、落ち葉でも掃くように単品として発現した暴力をどこかへ掃き寄せて、そして集めたものを権威筋に、お巡りさんとかに引き渡して施設か刑務所に放り込んでもらって、その後さっぱりきれいになったところに家でも建てて、周りに高圧線の通っている塀を建てて、そして銃を構えた警備員か何かをいっぱい雇って、その中で幸せに暮らす、そういうことを考えているのかと、ぱっと思えます。そういうふうには誤解されるとは考えていらっしやらなかったのでしょうか。私はそれしか目に浮かばなかったですね。ですから学会や勉強会、学び合いをするときは、テーマをどのように表現するかにもう少し注意を払ったほうがいいのではないかと思います。皆さんを叱っているのではなくて、主にうちで育った厚樹君に文句を言っているのだと思っておいってください。

それで、私が自分に問い掛けます。暴力とは、あつたりなかつたりするものか。幸せとは、それを目にかけて出掛けていく場所のことなのか。そういう疑問も心に浮かびました。世界の文学で、幸せという語がどのように使われているかは、調べておありですか。多分、皆さんはユートピアという言葉をご存じですよ。ユートピアはギリシャ語が語源です。ユーは否定でトピアは場所ということですから、Utopia とは「ないところ」という意味です。それを幸せのことと誤解して使っている学生が最近多いですから、この方たちがそうでないことを願います。ヨーロッパの古典詩の中に皆さんも聞いたことがあると思いますけれども、恐るべき詩句が一つあります。「幸（さいわい）、それは汝のあらぬところ。」これは Utopia に通じるものです。そういうことを踏まえた上で、幸せに向けてということ、自分たちはどういう意味で追求するか、考えていただかなければなりません。

Ⅲ. 暴力とは何か

1. 私の出会い方

私が原稿を書いて来た理由は、80歳になった途端に猛烈に物忘れがひどくて、この話をと思ったら次の瞬間には忘れていたという状態ですから、しょうがないから腱鞘炎のこの両手を使って一生懸命打って原稿は書いてありますが、問題なのはそれに縛られるということです。

まず分かりやすいレベルから私の出遭った暴力のことを話します。日常生活の中で次々と発現してくる単品としての暴力に、どうしても現代の私たちは出会います。私の場合は幼少期は第2次大戦中の日本ですから、そこは暴力の巷だったわけですね。大学卒業後直ちに留学をした先がアメリカです。1955年ですから、皆さんのご両親が生まれた頃じゃないでしょうか。その頃のアメリカというのは、今、ケネディ暗殺50周年ですけれども、非常に暴力的な社会だったし、なかならず公私ともに黒人差別が激しかったときです。私は東海岸に行きましたが、それでも私が入ったキリスト教会が建てた大学院には、黒人の学生が来ることができなかつたのです。聖書学の大学院ですが、私が入った次の年に、大学の歴史上初めて1人の黒人学生が入りました。しかし、彼は教授や学生と一緒に食堂でご飯を食べることが許されず、その町の黒人スラム街にご飯を食べに行かなければならなかつた。そういう時代でしたね。

アメリカで勉強を終えて、次に行ったのはイスラエルです。パレスティナ、エジプト、アルジェリアというような、つまり中東世界ですね。そこはもちろんユダヤ人对アラブ人という構図の、大変な暴力の紛争の場です。そこに長々といましたから、私が育つ過程でどれだけの暴力的な社会にいたか、それは皆さんもお分かりくださるでしょう。

日本の敗戦以来、現在第3次世界大戦みたいな状況の世界ですから、マスメディアはせつせと暴力を単発の例としてメディアで流すと思います。コンピューターとかテレビとかに流れてくる情報を見ていればいいのではない。映像とは流れ寄り直ちに流れ去るものです。見たら、必ず新聞や本を読み、話し合い、そして自分の想像力/創造力の両方を使って、自分自身のために、できれば学生の間に、暴力に関してきちっとファイルを作っておくことが重要です。コミュニティ福祉を勉強なさると、卒業後もそのような仕事のほうに向かうのでしょうかから、コンピューターの中に保存してあるのではなくて、きちんと紙に自分で書いたもの、ないしは自分で切り抜いて集めたファイルを作ることを心がけると、それ以後の勉強は楽になると思います。

2. 聖書における人間観

暴力のことを考えるに際して、大前提として一人一人が、その内的世界に養成しておくべき認識とは何か。それは最初から言っているように、命あるもの、特に人間の存在自体が暴力だということ。これは人間観です。真理とか何とかいうものではありません、人間観です。真理というものが存在すると私は思いますが、世界観、人間観、物の見方、考え方は、作り上げ次々に新しくしていかなければならないものです。皆さんは卒業するまでに、世界観、人間観を自分の内的な世界に養成すべきです。

命あるもの、特に人間の存在自体が暴力だという人間観は、これは2000年以上も昔に成立した、一般に聖書と呼ばれる世界史上の大文献が提示しているところです。聖書の持っている人間観、それを無視し、それを勉強してみることもせずに、「暴力」ということを考えるのは無理ではないでしょうか。一般に聖書についてはそういう解説をしませんから、私は今日それについてお話をしておこうと思っています。

それに関連して私のことをもう少し言うなら、上記のように私は第2次大戦が始まったときは小学生で、終わったときが中学1年生でしたから、身の回りで何事が起こっているかは分かっていました。私の一族は、明治時代にプロテスタント・キリスト教が日本に到来して以来、キリスト教とその文化によって生活していましたから、第2次大戦中には、政府があおる国粹主義の暴力を受けることになりました。周囲の日本人の激しい敵意、迫害とか暴力を受けて、第2次世界大戦を過ごしました。

それは暴力でしたが、戦後それでは暴力がなくなったかというところではなく、もっとひどい異なる暴力にさらされたと私たちは思いました。戦後、アメリカ軍に占領されると同時に、日本の社会状況はもちろん一変したのです。キリスト教はアメリカの大衆文化の代名詞に成り下がってしまったのです。やかましく安っぽい流行にキリスト教はなりました。

皆さんはそれを知るにはちょっと若過ぎるかもしれませんが。キリスト者の私たちのような小さな集団にとっては、戦前のキリスト教に対する迫害も、戦後安っぽく大流行したキリスト教も、どちらも精神的に襲いかかる暴力であることには変わりはないのです。それは、分かりますか。

元来、ナザレのイエスという人にとっても、(私はイエス・キリストとか、神様とか、聖霊とかは語らず人間としてのイエスを問題にしますから、ナザレのイエスと言います。イエスというとイエスカノーかというふうに分かるから、それでナザレを付けるのです。ナザレは彼の生まれ育った場所です。) そういう二重の暴力が降りかかったのかな、と考えてみました。イエスにも、第一に、誤った国粹主義、民族主義的な暴力が襲いかかって彼のことばと行いを危険視した人

たちが、彼を十字架にかけて残虐に殺しました。

しかし、彼の死後、彼自身の意図やことば、行いにほとんど無関係に、新しい制度ないしは組織宗教が発足しました。ユダヤ教からイエスのグループが分かれて300年経った果ての姿です。これが現在も続くキリスト教です。どんどん力を付けて有名になっていって、当時の東地中海世界には今の日本やアメリカみたいに新興宗教がたくさんあったので、その一つとして非常に流行し、やがて世界支配者だったローマ大帝国の国教という地位にのし上がったのです。

この、十字架につけられて殺されたということも、本当に自分のしたかったことと異なることが自分の名を冠した宗教になりローマ大帝国の国教になったということも、二つともにイエスにとっては降りかかった暴力と言わざるを得ないと私は思います。あまりこういうラディカルなことを言うと、後ろからナイフでぐさりやられかねない世界の現状ですが、ここは大丈夫だろうと思って話すのですけれどもね。

だから私は、このからくり、なぜこんなことになったのか、イエスとキリスト教の関係は何か、イエスを覆い隠したその覆いを剥いで、一体どんな人だったのかを調べなければならなかったと思ったので、大学を卒業した後に留学したのです。当時（1955年ですけれども）、そういう勉強をしに日本人が留学できる先はアメリカしかなかったのです。ヨーロッパはその頃、戦勝国であったにもかかわらず日本より貧しかったですから、アメリカに留学したわけです。そこで、ペンシルバニアの由緒ある大学院に入ったのですが、さっき言ったような黒人男性の問題がありました。しかし、それにもかかわらず大変ありがたい出会いが、アメリカで二つありました。

一つはその大学院の教授が、私がイエスのことを知りたいから聖書学をやると言いましたら、人はナザレのイエスについて知るには新約聖書学と言うかもしれないけれども、新約聖書とは単独で学問の対象になるものではない、その前提としての旧約学を学ぶのが先だと。しかも旧約聖書というものは、その背景にある古代オリエント世界を学ばなければ、本当に分かるものではない。だから新約学部に入ってもダメだということを教えてくれました。それが私の一生を決定した第一の重要な出会いでした。

もう一つの出会いは、マーティン・ルーサー・キング牧師という人ですが、ナザレのイエスを知るためには学問ではなく、むしろ彼が友だちだと思っただろうような人たちを、現代の社会に探し出して、その中に入って行って、全人間的に（最近ではホリスティックと言いますね）そのような人々の間に身を置いて、彼の生き方を全人間的に追求すべきだと教えてくれました。

その時、彼は私にある特種な眼鏡を掛けてくれたのです。特別な眼鏡を彼が私の目に掛けたものだから、彼との出会い以降アメリカのことも日本のことも、社

会がすっかり異なって見えるようになってしまった。そういうことを厚樹君に話したことがあって、「それはぜひ言ってもらいたい」と言ったような気がします。また質問のときにでも説明するかもしれません。

卒業後もアメリカで、いろいろラディカルなコミュニティ運動をしている人たちにたくさん出会って、実験的なコミュニティの影響を受けましたので、結局一生古代オリエント学を背景とする人間学の世界的テキストとしての聖書を学問することと、そこから社会活動をするという、そういう生き方になりました。

いろいろなことをし、迷ったり脱線したりたくさんしましたけれども、それでも「人間とは何か、人間とは何で在り得るか」、この二重の問いからは決して目を離してはいけないとは常に思っていました。

それで、暴力ですけど、今言ったとおり第一に人間とは何か。すなわち、人間存在には暴力が内在します。しかし、同時に人間は何であり得るか。すなわち、人間は暴力を制御し得る存在だ。「なくする」と言いません。コントロールという単語は、英語では便利なことばですけど、日本語だと大抵何か統制をかけるような翻訳をしますから、仕方がないから「制御」という訳にしておきます。

人間とは何か、人間存在には暴力が基本にある。しかし、人間は何であり得るか、人間はその元来の暴力を制御することができる存在だ。この人間観がさっきから言っているように今から2500年ほど前に、聖書が全世界に向けて提示した人間観/思想です。聖書の文学というのはいろいろな妙な話がいっぱい入っています。けれども、その基本にはこの人間観があります。

従って、聖書というのはきれいな事ばかり書いた本ではありませんし、皆さん、どれくらい開けてみたか分かりませんが、立教大学に入れば新共同訳聖書か何かを買わされるのでしょから、持っていらっしやることは持っていらっしやるでしょう。この人間観が基底にあるお話ばかりが書いてあるので、聖書というのはかなり乱暴な書物です。人間の在り方を正直に書いてあるということですかね。

立教大学、この大学はキリスト教主義の大学ですから、ここで教育に携わる方々は、教授とかスタッフの方々とか、クリスチャンである方もない方もあるでしょうが、クリスチャンであるなしを問わず、この基本的な古代オリエントから伝わる聖書の人間観については十分ご存じだと思いますし、同時にこの人間観は歴史を俯瞰して見ると、必ずしもうまく機能してきたわけではないということもご存じだと思います。

聖書は、2000年間世界を支配してきたユダヤ-キリスト教が、その統治の基本とすべき人間学による歴史書だったはずですが、しかし残念ながら最近までユダヤ-キリスト教に基づくギリシャローマ文明圏（その最後のところにわれわれがいるわけですが）において、この書は正確に読解されていなかったという事実を認めざるを得ないと思います。自然科学、社会科学、人文科学等の諸分野（これ

はちょっと古いかもしれませんが、今どき社会科学だとか人文科学だとか言わないかもしれませんが、なにしろ私は81歳ですから勘弁してちょうだい)、これらの諸分野の研究も未発達だったし、幾らかあった成果も学際的に共有するなどということは起こっていなかった事実が、聖書が十分に読解されなかった理由の一つでしょう。

が、それよりもっと恐ろしい理由は、ヨーロッパやアメリカの権力構造を支える国家宗教になったキリスト教は、政治と宗教に必然的につきまとうアポロギア（普通は護教、自分の宗教の主張を守る、これは政治も同じですが自分たちの立場を詭弁を弄してでも守るということ）をもつがゆえに、聖書のメッセージを意図的に誤読し続けたと私は思います。それだけではないでしょうが、それが非常に大きかったと思います。

これが現代社会・国際社会を悩ませている政治的な暴力と思想的な混乱の主な責任です。ユダヤ-キリスト教が主な責任を負わなければならないと私は考えています。両方とも知らん顔はしていますがね、内心そのことにじくじたる思いをしている本当のユダヤ教徒やキリスト教徒はいないわけではないのです。しかし、それを声高に主張すれば命と自分の仕事の場とが安全かどうかは分からない、というのが現代の社会です。

さらに、この二つの宗教に影響されて出てきたイスラムがありますから、この世界三大宗教が陥っている人間観に関わる大混乱、彼らの制度と神学が変質し衰退していること、それらが現代社会の混乱や悲劇の主な原因だということは、私のように古代オリエント学を勉強したり、聖書を勉強したり、しかも何十年も中東で生きてると、そしてユダヤ人、アラブ人の紛争の中に巻き込まれていると、どうしてもそう認めざるを得ない実情です。

3. 聖書 創世記1～11章を読み解く

聖書のどこからこの恐るべき人間観が出てきたのかということをご紹介しようと思います。どうも聖書というのは苦手だという方のほうが多いと思いますが、大体名前も悪い、聖なる書物では読むのはご免と、どうしたってなりませんから。聖書の本当の名前は単にThe Books、英語にすればそれだけなのです。けれども「本」だけでは名前にならないから、漢訳聖書からもらってきたのかもしれませんが「聖書」と、格好をつけているわけです。しかし、それが聖書自体の首を絞める結果になり、聖なる書物じゃ、買わされたけれども棚の上に置こうとなる。キリスト諸教会にも立派な聖書があっても、1週間のうち6日間は台の上に乗っかっていて日曜日になるとささげ持って歩いたりするだけのところがあるのじゃないかと思います。本当に面白い書物として世界に冠たる人間学の書として読まれるかということ、まだそこまではいっていないのです。

聖書の提供する人間観が「人間とは何か、何であり得るか」ということならば、聖書のどこを開いても、それを念頭に置いて読めば、あらゆる文学類型を使ってそれについて語っています。

その中から現代人に分かりやすい例を挙げるとすると、聖書の得意とする文学類型である「物語」によって、創世記1～11章に人間論とも呼ぶべき物語群があります。創世記の1～11章が一つの単位であることを知らない聖書学者もいるぐらいですが、皆さんは覚えておいてね。

創世記1～11章までは全人類に関わる、古代なりの人間観のお話です。12章からイスラエルの歴史物語が始まるのですが、そのぐらいいは立教大学に来たのならついでに知っておいてもいいかもしれません。その創世記の1～11章にある人間論はなかなか面白いのです。

私が思うには（別に立教大学のカリキュラムに意見を出そうなどと思っているわけではないのですが）、キリスト教主義の大学だったら創世記1～11章の人間学的な読み込みは、学生全員に必修にすべき科目だと思います。キリスト教入門とか、聖書学入門とか、宗教的人間学とか、その手のことではなくて、創世記の1～11章にある、面白い人間論というのをちゃんと話せば、それでもう入門になると私は思います。それは基礎テキストです。

どんなことが書いてあるか、現代人の私たちがそこからどんなことが読み取れるか、ちょっとお話したいのですが、本当はテキストを前に置いて、小さなグループで一節一節、一語一語読み解いていくと面白いのですけれども、その時間がないから簡単に言います。

まず第一に、命あるものは必然的に暴力的存在だということを示しています。古代の書ですから、そういう現代的なものの言い方はもちろんしません。しかし、読む私たちが人間存在と人間存在の暴力ということを真剣に考えているなら、読めばそこから必ず読み取れるような、はっきりしたお話です。

創世記1～11章には幾つかの単元があります。まず第1章、これは天地創造の物語と称されて、名前だけが有名で、神様が無から有を作ったとか、大地に何を作ったとか、とんでもない神話が書いてあるぐらいいしかご存じないかもしれません。1章2節から2章4節前半までに書かれているのは、イスラエルという王国は滅びた。なぜ自分たちの国は滅びたのか、国家は再建できるのか、という非常に真剣な知的な活動を続けた上で作り上げた、その当時の思想家たちの「宇宙の秩序」に関わる観察の結論なのです。

でも、お話のように叙事詩の形で書いてありますから、内容/思想を読み取るには、読む人に文学的な蓄積と問いとがなければ、恐らくちんぷんかんぷんかもしれない。ですから、立教大学では読み方を教えてくださればいいと思います。

初めに、神は天地を創造した。

地は混沌、闇が原初の水の面にあり
その水の面に、神の霊が働きかけた。

神は言った。

「光あれ。」

そして、光があった。

神は光を見て、良しとした。

神は光と闇を分けた。

神は光を昼と呼び、闇を夜と呼んだ。

夕べがあり、朝があった。一日。

神は言った。

「水の中に蒼穹あれ、

水と水を分かつものであれ。」

水の中に蒼穹を作り、

蒼穹の下の水と蒼穹のうえの水を分けた。

そしてそうあった。

神は蒼穹を天と呼んだ。

夕べがあり、朝があった。第二の日。

神は言った。

「天の下の水は、一つのところに集まれ。

乾いたところは現れよ。」

そして、そうあった。

神は乾いたところを地と呼び

水の集まったところを海と呼んだ。

神は見て、良しとした

神は言った。

「地は、青草を地の上に芽生えさせよ。

種を実らせる草

種をもつ実なる木を。」

そして、そうあった。

地は青草を現れさせた。

種を実らせる草を、種類に従つて

種をもつ実なる木を、種類に従つて。

神は見て、良しとした。

夕べがあり、朝があった。第三の日。

神は言った。

「天の蒼穹に、光を放つものあれ。

昼と夜を分け

季節の、そして日と年のしるしであれ。

天の蒼穹において光を放ち

地を照らせ。」

そして、そうあった。

神は、光を放つ大きなものを二つに作った。

大きな方は、昼を治めるように

小さな方は、夜を治めるように。

そして、星たちも。

神は、それらが天の蒼穹にあって

地の上を照らし

昼と夜を治め

光と闇を分けるようにした。

神は見て、良しとした。

夕べがあり、朝があった。第四の日。

神は言った。

「水は生き物を群がらせよ。

鳥は地のの上、天の蒼穹の面を飛べ。」

神は創造した

それぞれの種類に従つて、大きな海獣と

水の中に群がり泳ぐ生きものを。

それぞれの種類に従つて、翼ある鳥を。

神は見て、良しとした。

神は彼らを祝福し、言った。

「生めよ増えよ、海の水に満ちよ。

鳥は地において増えよ。」

夕べがあり、朝があった。第五の日。

神は言った。

「地は生きものを、種類に従つて現れさせよ。

家畜、這うもの、地の獣を、種類に従つて。」

そして、そうあった。

神は作った

地の獣を、種類に従つて

家畜を、種類に従つて

土に這うものそれぞれを、種類に従つて

神は見て、良しとした。

神は言った。

「我々は人を作ろう

我々の写しとして

我々に似たものとして。

海の魚、空の鳥、家畜

地の上を這うものをすべてを、支配するように。」

神は、人を自分の写しとして創造した。

彼を神の写しとして創造した。

彼らを男性と女性に創造した。

神は彼らを祝福し、彼らに言った。

「生めよ、増えよ、地に満ちよ。

地を従わせ

海の魚、空の鳥

地の上を這う生きものを、すべて支配せよ。」

神は言った。

「見よ、食糧として

全地の面の、種を実らせる草をすべて

種を実らせる実をもつ木をすべて

あなたたちに与えた。

地の獣すべて、空の鳥すべて

地の上を這うものすべて

これらの命あるものには、

あらゆる緑の草を、食糧とする。」

そして、さうあった。

神は作ったものすべてを見た。

見よ、それは極めて良かった。

夕べがあり、朝があった。第六の日。

天地とその万物は、すべて完成された。

第七の日、神は働きを終えた。

第七の日、作る働きのすべてを措いて安息した。

神は第七の日を祝福し、

創造の働きすべてを措いて安息したその日を

聖とした。

これらは、天地創造の次第。

(未完成の私訳、『ことばは光1』(2006、
新教出版) 参照)

読んでいきます。「神は言った」というのは、神が前提になっている時代のものだからですが、皆さんはそこに何を感じても構いません。宇宙を観察し、進化の秩序とでもいべきことを書いてあります。「闇と光」とか、「上の水と下の水」とか。上の水って雨のことで下の水って川のことだ、で終わっては駄目ですよ。これは古代オリエントの政治構造に関わる詩的な表現ですからね。

その中に食べ物の話が出てきます。命あるものが次々と観察されて分類され、最後が人間。命あるものは何かを食べなきゃならない、エネルギーを取らないと死んでしまう。従ってそこに食べ物を定めるという話が付いています。

食料として全地の種を実らせる草を全て、種を実らせる実を持つ木を全てあなたたちに与える。あなたたちというのは人間です。つまりは穀物と果物は人間が

取りなさいと。地の獣全て、空の鳥全て、地の上をはうもの全て、これらの命あるものにはあらゆる緑の草を食料とする。要するにまずは菜食主義というような変な話です。なぜそんなことになるのかは、その次に続くもう二つのテキストを読むと分かります。

この話に続く2～4章には、アダムとエバだとか、カインとアベルだとか、バベルの塔が建つとか面白い話があって、それは全て人間が、本来善くあるために与えられた資質を使って、暴力を発現させたという話で、三つ一組の話だと私は思いますが、それはちょっと時間がないから飛ばして、皆さんご存じの、ノアの洪水という話があります。創世記6～9章に書いてあるのですが、最後の8章のところから9章の初めのところに、また食べ物の話が出てきます。ですから創世記の1章にあった、菜食主義みたいな話の続きのようなものです。その関係するところだけ読むと、動いている命のあるものは全てあなたたちの食料とするが良い。私はこれら全てのもは青草と同じように、あなたたちに与える。ただし、肉は命である血を含んだまま食べてはならない。(これは、現在もユダヤ人がもっている、ピフテキを食べようと思っても血の滴るようなとはいかない、律法に従って、殺したらすっきり血を抜いて食べるという習慣が出てくるところです。)血は命の象徴とされるからです。妙な話ですけれども。「仕方がない、肉も食べてもいいですよ」みたいな話です。善から悪を志向する人間に対する処置とでもいうお話です。

けれども、最後にもう一つ、創世記ではなくて預言者イザヤの書というのがあり、大変有名ですが、そこから抜き出してきたテキストを読むと、以上の二つのテキストの意味が、本当に言いたかったことが分かってきます。聖書を開いてちょっと長いですがけれども読んでみますから聞いてください。イザヤ書11章です。

〔「平和の王」という小見出しが付けられています。聖書のヘブライ語原典にあるのではなくて、この「新共同訳」を翻訳したり編集したりした人たちが付けた文言です。〕これは、「終わりの時」を夢に見て歌った詩です。自分たちの状況が絶望的になってしまった詩人が、必ず終末の良い時代が来ることを願って作った歌です。

「エッセイの株から一つの芽がもえいで、その根から一つの若枝が育ち、その上にヤハウェの霊がとどまる」。ヤハウェというのはイスラエルの神様の固有名詞です。神様に名前があるとは実に変な話です。天照大神とか何とか、肥沃宗教を奉じる人間が、宇宙の中に認識するものを次から次に神格化して神様だと思うならそれぞれに名前を付けないと、たくさんあるから分類できませんが、ただ一つの神様、一神教なら(ただ一つというのも変ですよ、神様を数えたりするわけにいきませんから、それからして「神様」というのは妙な話なのですけれども)、

神に名前を付けることはないはずで。ですからイスラエルの旧約聖書の神様がヤハウェという名だということは、旧約聖書を書いた人たちは、唯一神教を考えてはいない、唯一神教は中世以降の話です。聖書はそんなことは言っていない。どの民族も自分の神様をもって、それには名前がある。我々イスラエルはヤハウェという神を仰ぐということしか言っていない。これは唯一神仰ではなくて拝一宗教、一つを拝むという分類をするべきものです。

(本来ユダヤ人は畏れ多いから決して神名ヤハウェを発音しないということになっているので、新共同訳もヤハウェと書かずに、「主」という語を置いています。「主」という語をヤハウェという固有名詞の代わりに使うことには問題があります。なぜかというと、「所有者」というふうに関係するからです。所有者という名前は、イスラエルが固く禁じた宗教の神「バール」、肥沃宗教の男の神の呼称です。「バール」とは「主人」という意味で、ヘブライ語でも夫という意味になるので、フェミニズムをやっているイスラエルの女性は自分の夫はバールと呼ばないというようなことまであるわけで、所有されているのではないと言いたいのです。これは翻訳史上の習慣になっているので現在も「主」を使っています。)

将来、理想的な指導者が現れて、その上にヤハウェの霊がとどまる。これがカリスマティックということの基本的な意味です。神の霊が与えられ、ごくその辺の普通の人だと思っていたのに突然何かすごいことをやり始めた、これがカリスマ的な指導者ということで、ヘブライ語でメシア、それをギリシャ語に訳してキリストと言います。

その上に主の霊がとどまる。

知恵と識別の霊

思慮と勇気の霊

主を知り、畏れ敬う霊。

彼は主を畏れ敬う霊に満たされる。

目に見えるところによつて裁きを行わず

耳にするとところによつて弁護することはない。

弱い人のために正当な裁きを行い

この地の貧しい人を公平に弁護する。

その口の鞭をもって地を打ち

唇の勢いをもって逆らう者を死に至らせる。

正義をその腰の帯とし

真実をその身に帯びる。

(イザヤ・215)

『聖書 新共同訳』(2009、日本聖書協会)より引用

ここまでのところは、「終わりの日」を待ち焦がれる現状に絶望した詩人が描くその終わりの時を導き出してくれる理想の指導者像です。その人が出てきたとき、理想の状態が来る。それがその続きに書いてある。どういう状態か。

狼は子羊と共に宿り
豹は子山羊と共に伏す。
子牛は若獅子と共に育ち
小さい子供がそれらを導く。
牛も熊も共に草をはみ
その子らは共に伏し
獅子も牛もひとしく干し草を食らう。
乳飲み子は毒蛇の穴に戯れ
幼子は蝮の巣に手を入れる。
わたしの聖なる山においては
何ものも害を加えず、滅ぼすこともない。
水が海を覆っているように
大地は主を知る知識で満たされる。
(イザヤ・6-9)

『聖書 新共同訳』(2009、日本聖書協会
より引用)

すでに2番目に読んだところは肉食も許している、神様があきらめて妥協したかのような書き方でした。この終わりの日を望む歌で再び、猛獣も家畜も小さな子どもが彼らを養い、そして干し草、青草を食べるのだと。一つの命は他の命に害を与えることも滅ぼすこともないのだ、と歌われている。三つのテキストをつなぐと、ひとつの命が自分の命の維持と、次世代を生み出すこととに真剣に関わる場合、どうしてもそこに暴力ということが含まれてしまう。しかし、それは克服できる。人間は克服し得る存在だということを示す。徐々に暴力を制御していくことができる、と聖書は提示しています。

食料の話はともかくとして、人間存在にまつわりついている暴力、一つの命あるものはその命の維持と次世代産出のために他の命を犠牲にするという本性、これはあらゆる発現の仕方をします。最終的には殺すところまでいくこともあれば、その手前で意地悪をする程度の抑圧もあるでしょう。

暴力という形で発現するのは人間の本性だし、人間というよりは命あるものの必然だということを観察して、それがいいとかそれが真理だとか教えようとするのではなくて、あくまでも宇宙の中に観察し得ることを的確にことばにする、そこから思想を作るのだということを示しているのです。制御する、こうあるべきだという方向に向ける、そのプロセスに人間の望ましい姿、いわば幸せが恐らくとぎれとぎれでしょうけれど伴ってくる。やがて、「幸せ」という「暴力」と同様に人間の本性に初めから与えられている状態が、それとして享受され認識されるように私たちは育つでしょう。幸せも暴力も等しく本来の人間の条件で、終わりのときには暴力性は克服され恒常的な幸せが成就することを志向して生きる。抽象的な言い方ではなくて、命の保全のために基本的である食べ物を使ってお話を作っているのです。

聖書の文学は全て象徴的ですから、一つのテキストを象徴として読むためには、自分の中に文学的な蓄積と連想の力が発達していなければなりません。簡単ではないかもしれませんが。自分が良いことばをもち、そのことばによって思想を作るというプロセスは、どうしても基本に一定の読書量を要求します。本を読むということは人間の栄光ですから、今は哀れなことに滅びかかってはいますけれども、せつかく学問の座に座っていらっしゃる皆さんはちょっと考え直してください。

4. 人間に内在する暴力と幸せ

人間本来の条件としての暴力と幸せの関係について、一つだけエピソードをお話しします。それは私が経験したもので、「地に平和」のニュースレター『シンビオーシス』の最近の73号に小さなエッセーとして出しておいたものです。なぜ何年も前に書いた小さなものを突然そこに載せたかということ、厚樹君が、暴力のない社会云々と言ってきたからです。

エルサレムにあるユダヤ人経営のホテルに私が休みのために行っていたときの出会いの話です。イスラエルでは、国の中にパレスティナ系アラブ人が組み込まれていますから、3K労働と昔日本で言いましたけれども、嫌なことは全部パレスティナ人に押しつけて過酷な労働をさせるという状態が今も悪くなる一方です。私は長年、1962年にヘブライ大学に留学して以来、現在まで行ったり帰ったりしますから、どんどんユダヤ人社会の内部崩壊が進むことと、そして同時にパレスティナ系アラブ人の精神世界にも内部崩壊が起こっているということを、非常に残念に思いながら観察しています。

ユダヤ人は安い労働者としてパレスティナ人を連れてきます。日雇いで、時には明日賃金を払うから明日来いと言って賃金を先へ先へと延ばしておく、消される人もいるし、パレスティナ人労働者が負っている毎日は、大変に苦難に満ちたものです。

それはともかく、私は或るホテルに休暇のために泊まっていたのです。エルサレムは天然の要塞みたいところで周りが深い谷になっています。エルサレムのオールドシティを巡る城壁の周りは深い谷になっていて、その反対側の急斜面にホテルが建っているのです。その美しい急斜面を庭に仕立ててあり、反対側のエルサレムの城壁が、どの部屋のテラスからも見えるようになっています。私はそのテラスで、非常に美しい景色なので眺めていたら、その谷底からそのホテルに雇われている日雇い労働者のアラブ人の男が登ってくるのが見えました。その労働者は、回り道もあるのだらうけれども、その急斜面を必死で登ってくるのです。なぜ必死で登ってくるかということ、背中に彼の体の3倍ぐらいある大きな荷物をくりつけられているのです。それがどんなに重いものなのか私には分かりません。それはお客が帰った後に集めたシーツとかタオルとかです。彼はもう少し

平らな回り道を行くこともできるけれども、時間稼ぎのために急斜面をよじ登るのです。それは恐ろしい苦痛ですから、私のテラスの近くを通ったとき彼の顔がどんなに苦痛にゆがんでいるか、私にははっきり見えたのです。ユダヤ人経営者はその苦しい労働を軽減するための手段を幾らでも持っているはずなのですが、それにお金は使わない。私はせっかく休みに来たのに、という感じでしたが、彼の顔がゆがむように私の心がゆがんでしまって非常に苦痛でした。

次の日がたまたま金曜日、ご存じのとおり金曜日は、イスラムの安息日です。(エルサレムに行ってごらん下さい、大変です。キリスト教は日曜日に休むし、イスラムは金曜日に休むし、ユダヤ教は土曜日に休む、それは必ずどこかの店は開いていることになりますから、便利といえば便利ですが非常にややこしいのです。)それはともかく金曜日には彼も仕事はしないのです、モスLEMですからね。

私は金曜日にはオールドシティの中のイスラムのマーケットがとても楽しいにぎわいになることを知っていましたから、ちょっと出掛けたのです。そうしたら、その同じ労働者がいるのに気が付きました。どこにいたかという、お菓子屋さんの前に立っていました。ちょっとござっぱりしたシャツを着て、かわいらしい男の子の手を引いて、片腕に小さな女の子をしっかりと抱いて、そこでアメを買おうとしていました。何か小銭を出して少しアメを買いました。私は横に立って見ていたのです。アメの紙をはいで女の子の口に入れてやって、男の子には手にアメを渡してやって、その父親と2人の子どもはとても楽しそうに笑いました。私の心は、その労働者のことでちょっとねじれていたのですけれども、その姿を見て、ああ、こういうことなんだと、ちょっとほどけました。うれしそうにして3人で帰っていきました。

その男はパレスティナ系アラブ人ですから、日ごとにものすごい暴力に襲われている人です。やっと生きているわけです。ユダヤ人が浴びせる言葉と行為による暴力もあるし、逃れようもなく降りかかる政治的な暴力がある、自分たちの土地を奪ってイスラエルという国ができたのですからね。仕事の過酷さという暴力もあるし、日雇い人夫は文句を言えば仕事を失うという恐怖からくる暴力もあるし、貧しい生活に必然的な精神的な抑圧という暴力もあります。それらを全部彼は一身に負ってやっと暮らしているわけです。

それにもかかわらず、このパレスティナ系アラブ人たちが持っているものがあります。それを先進金持ち国の日本は、失いつつあります。それは何かというと、金曜日という聖なる安息日です。こういう労働者にとっては、わずかの人間本来の幸せを享受するときです。なぜそれが可能なのか。置かれた状況はものすごく悪く暴力に満ちているのに、週に1日、なぜ彼はそうやってにっこりすることができるのか、それは彼の「家庭」が崩壊していないからです。日本はもう危ないです。

パレスティナ系アラブの家族に関する考え方は、母親は生命を生み出し育む源で、父親は生活費を稼ぐ。そのためあらゆる迫害、暴力に耐えていますけれどもその小さな家庭では尊敬され愛される男性、父親なのです。これはまだアラブ人社会に非常に強く、特にパレスティナ・アラブの家庭に残っていることで、日本の上等な家庭では、あまり見かけないほどです。それが彼に、どんな暴力の中で営々と生きていても、人間の幸せということを週に1回あじわう瞬間を与えるのです。日本の社会はべったりと、ぼんやりと、漫然と暮らしていて、このリズムがないといわれています。そう考えて、このエピソードを書いたのです。日本では、低開発国とか紛争地とか貧しい国について話し、その人たちがどれだけの苦難を負っているかと話そうものなら、日本人は自動的にその人たちが不幸なのだなんて思って「かわいそうに」と言います。肉体的、物理的、精神的な苦痛の中にあっても、人間本来の幸いを知っている貧しい人々もいるということ、日本人は理解しませんが、皆さんはどうですか。

IV. 聖書が投げかける問い

もう終わりにします。ただ、聖書は文学だということを強調しておきたいと思います。文学というのは現代、先進技術世界では、特に日本では衰退する一方です。文学部というのはなかなか人気がない。しかし、皆さんもよく知っていらっしゃる通り、人間が真に人間であるのは、さまざまな道具を使いこなせるからではないのです。そうではなくて、文学を信じる、すなわち書くことも語ることもできる、自分のことばをもっている、その自分自身のことばで自分の思想を育て、そして人間の特権である内面の世界、内的な宇宙を豊かに開拓し、そのことで、本来、命に伴う暴力の発現を制御し、肯定的な力に変えていくことができるからです。

そうやって「ことば」を集め、同時に他の人々と顔を合わせて、実際に顔を合わせて腕を組んでよく話し合っ、特に感動したこと、難しいと思うことを語り合っ、そしてさまざまな「知」（フィロソフィのソフィア）、知ること（これは聖書のもう一つの大前提です）、知の追求、その知を営々と蓄積し、それをもって基礎文書（基礎になるテキスト/思想）を作り出し、その基礎文書を土台とするコミュニティーを築いて、そこに緩やかに連なる。こういうような生活のプロセスによって、命の根源に備わる幸いをそれとして享受できるような人間になるのです。あれこれのすごい道具を使うことではないのです。

いやしくも大学と呼ばれる場所なら、世界中の文学、日本や英国、ドイツ、フランス、ロシア、イタリア、スペイン、アジア、etc.と、世界中の言語と文字によって記録され蓄積されてきたもの全てを、「文学」として一つの学部で一緒に研究する、その一つの学部を当然最重要学部として備えるべきではないでしょうか。

そこにおいて聖書も、宗教書/神学書ではなくて世界最高の文学として、他の諸文学と同じように研究され、教えられ、学ばれるということができるようになれば、現在、文字を使い始めてから5000年たった私たちの文明世界を維持することができるのではないのでしょうか。どんな天才でも単独では決して知り尽くし得ないようなこの聖書という書物、人間に関わるこの大著の、このような共同研究に誰でも参画できるということが、いつか当然のこととして実施されることを夢見ています。

結びに代えて繰り返しますが、命あるものは自分を生かし種を保存するために、他の命を犠牲にします。これは取って食うということだけではなくて、さまざまな小さな否定的な他に対する行為というものを全て含みます。一つの生命の存続は、他の生命への暴力になりかねない、実際そうなっています。だから、ピタゴラスにしても仏教のお釈迦様にしても、肉食主義ということを考えてなのでしょう。動物の世界に関しては弱肉強食と称して、つまり生態系とか系列化とか呼ばれることで説明しようとしていますし、一つの生命の死が他の生命を生かす糧となるというサイクル等が考えられています。

人間はなぜこの自然のサイクルに対して、破壊的存在なのでしょう。人間は物質的な存在ですが、物質的な存在の一部として強烈に進化してきた脳を持っています。それがことばを獲得し、自意識という内的な世界がそれによって生まれ、それは元来自己中心的に発現する性質を帯びているのかもしれませんが。

創世記1章の描く宇宙の秩序においては、人間にはその全体を治める責任と能力、そしてその栄光が与えられていると描かれています。生態系全体の命のサイクルを保全することと人間の本性であるかに見える利益追求の活動。この二つ、命のサイクルを保全することと利益追求ということは、バランスを取り得るものなのでしょうか。バランスを取るためのリテラシー、それは人間が実現し得るものなのでしょうか。そういう問いばかり出して、今日の話が終わることにします。

●質問1 (司会)：ありがとうございます。まだ、少し時間がありますので、質疑応答に移らせていただきたいと思います。最初にお話したように、少し今の話は抽象的だと思われる方もいるかもしれません。ぜひ、具体的な内容について質問をいただけたらと思います。マイクを回しますので挙手願えますか。

まず、早速僕のほうから質問させてください。上の水、下の水というのが政治構造というのは、抽象的ですからちょっとそこるところをもう少し、詳しく教えていただければと思います。

●太田氏：マックス・ウェーバーという人が言い始めたことですがね。私の父は電子工学者ですが、マックス・ウェーバーに凝って、10代初めの私に

一生懸命、自分がおもしろいと思うことを聞かすという迷惑な親だったのです。それで私が14～15歳のときから、「上の水と下の水」という聖書の話は、人間世界の権力構造のことであるというふうに毎日言っていたわけです。

どういうことかといいますと、イスラエルが古代オリエン特世界を観察して、そこで発見したことをこの章節に詩の形で言い表したのです。だから、読めないとなれば読めないかもしれません。上の水というのは確かに雨のことです。下の水というのは古代オリエン特世界を大帝国内に仕立てている大河のことです。海は農業に役に立ちませんから、川です。古代オリエン特文明圏という世界で一番古い文明圏は（もしかしたら中国の方が古いかもしれないと思うのですけれども、まだ今のところ中国とかインドとかの古代文明に関しては、世界の誰でもが客観的に自由に研究するところまで開放されていませんから、現在のところは誰でも客観的に研究するだけのことが整っている学問として、古代オリエン特文明圏が最も古いということにして話をします）大河があるから成立したわけでしょう。古代オリエン特文明圏は、アラビア砂漠とか乾燥地帯、雨が降らないところです。地中海とペルシャ湾とインド洋があるとお思いになるかもしれませんが、雨というものは季節風が吹かないと、そしてある地理的条件がないと降りません。ですから大河に依存しないと国家構造は成立しないのです。

大河に依存して国家の社会構造を作るとどういうことになるかということ、川というものは治水をしなければなりませんから、どうしてもトップに大権力が集中して、役人のシステムがしっかりできて、国民の大部分は治水のためにかり出される労働者ということになります。そういうピラミッド型の構造ができるということです。これが下の水という創世記章の言葉で表している古代イスラエルの、古代オリエン特世界の大帝国内に関する観察の結果です。

なぜ、こういうことが言えるかということ、自分たちが国を作ったところは川がないのです。その代わり何があるかということと地理的な条件のゆえに、川はありませんが高い山地にいたために、東と西に風が通ります。東はアラビア砂漠で西は地中海ですね。そうすると1年は二つに分かれ、乾期と雨期があり10月頃から3月頃まで、地中海から湿気を含んだ風が東に向かってアラビア砂漠へ吹きます。途中の高い山地にいるイスラエルの高度は800m前後で、東側に有名なヨルダン地溝があって海面下200～400という低さの熱帯的な谷です。西から地中海の湿気を帯びた風が東に向かって吹いてくると、このカナン中央山地と呼ばれる山地にぶつ

かって雨を降らせます。それは10月～3月までの一定期間。一定期間ということは農業ができるということです。そして4月～9月までは全く雨が降らない乾燥期です。きちんとサイクルが動いていくのです。もっとも今は地球の気候変動で、それが乱れかけて大変な問題がイスラエル、パレスティナ地方にも起こっています。聖書時代には非常に定期的でした。私が留学していた1960年代も、まるで本当に測ったようにきちんと雨期と乾期がやって来ていました。

ですから、メソポタミアとエジプトをつなぐ真ん中の小さなところだけ、雨が降る地中海的気候です。そこにオリーブとブドウができて、それが現金収入をもたらすから、小さな何もないようなところに見えても生きる可能性はある。ヘブライと呼ばれる社会層の難民みたいな人が入ってきて、イスラエル国を建てるだけの力をそこで付けたのです。

それで全世界を見渡すと、東北のメソポタミアも南西のエジプトも大河依存です。つまり下の水です。自分たちは上の水。それで下の水はピラミッド型の社会構造を生み出し、上の水は新約聖書でイエスが言ったとされるように、「太陽は誰の上にも昇る、雨は誰の上にも、良い人の上にも悪い人の上にも降る」から、雨は、平等という思想を導き出す。下の水は権力構造、ピラミッド型の構造を導き出す、と考えたのでしよう。

- 司会：ありがとうございます。とても大事な点だと思ったので、ちょっとご説明をいただきました。他に、どうでしょうか、何かないでしょうか。時間が無いようでございますので、もう1回手を挙げてください。
- 質問2（参加者）：一般参加として参加させていただきました。興味深いお話をありがとうございました。少し、意見という形になってしまうかもしれないですが、一番最後にパレスチナ人のお話がありました。週に一度金曜日に安息日があって、それは先進国の日本においては失われつつあるというお話しされていたと思うのですけれども。

私は平たく言うと暴力ということが先進国で、幸せを失ったわけではなくて、その自由によってさらなる幸せを追求の段階にあると思っています。こういう場での発言はあまり得意じゃないので、うまくいえないのですが、どんなに虐げられようと家庭において夫という地位があって、尊敬されていて汗をかいて彼は幸せを、そこで得ているということだと思うのですけれども、それは少し盲目的かなと思いました。

- 太田氏：多分、つまらない話に聞こえるだろうと、私は思いました。そんなことで、満足できるのかなという感じでしょうけれどもね。

私は、あなたが幸せの追求をできるような今の社会だとおっしゃるな

ら、それで頑張ってくださいればいいと思います。

私の話は、どちらかというときリキスト教に対しても現代社会に対しても批判的に聞こえたかもしれませんが。大体80年生きてきて、否定的にならざるを得ないようなことばかりを通過してきましたから、これはしようがないと私は思っています。多分、日本でいい状況にあって、とても幸せな状態で生きていて、そして日本は島国ですから、どれほど世界の状態が悲惨かということは実感しにくいので、私の話が極端に聞こえるのではないかと思います。日本の島国の中に閉じこもっていて、今の政府が何をやり出すか分かりませんが、どんどん締め付けが厳しくなって、多分第2次大戦前の社会のようになるのではないかという気が、私はします。今、幸せの追求が可能だともし実感していられるなら、それが壊されなければいい、と願います。

無理に苦しまなくてもいい、無理に悲しがることもありません。自分の置かれた状況を十分に楽しんだらいいと思いますが、できるだけ広い世界を自分の中に取り込むようにして、そして可能ならできるだけ広い社会に出て行って見てきてください。世界的に4人のうち3人の子どもは飢えているという統計がありますし、真面目に国連や新聞などの統計をみれば、今の何十億の人間の状態は決して幸せと一般的に呼べるようなものではないということが分かります。大体日本みたいな火山国に50もの原発がある上に世界中に大量殺戮兵器とか核兵器とかがじゃんじゃん増えていくし、それを制御できるだけのリテラシーを持った政府ばかりではありませんから、私はこの現在の文明社会の行く末は危ないと思っていますのです。ですから、幸せに頑張れる気持ちの方はどうか、それが続くように運動をしてください。まず、第一によく知ること、勉強をすることです。

- 質問者：ありがとうございました。偏った感じがしたので質問させていただきました。
- 太田氏：まあ、そうでしょう。かなり極端に話しているかもしれません。私の年齢もあるし経験もありますのでね。
- 司会：道子さんは、懇親会にも参加いただけるということですが、あと1人。
- 質問3（参加者）：本日は貴重なお話ありがとうございました。本日の、暴力は人間存在の根源というのがすごく印象に残ったのですけれども、逆に人間のいい部分について先生はどうお考えになられているのか、よろしくをお願いします。

●太田氏：いい部分ね。いい部分のほうが量的には大きいかもしれませんが。なぜ、根源に暴力があると言うのか。人間の良い在り方はもろくて、ほんのわずかの暴力の発現ですぐ崩されてしまうのです。3.11のことまで引っ張り出さなくてもいいのですけれども。人間は限界のある存在だということは分かるでしょう。生まれたら必ず死ぬというのがまず人間の限界ということです。聖書はそれを、「死の影の谷を歩く」と言いますが、死の影のさす谷を歩くというのは、うつ病から言っているのではないのです。そうじゃなくて、生まれたらどうしても命とは時間ですから、変化するとは時間ですから、時間を止めることはできないし、命の変化を止めることもできない、何十年生きるかはともかく、行く先は死だという意味です。人間が生き始めると、影のようにこちらに向かってそれが見えてくる。しかし、この詩はやはりヤハウェ宗教の詩です。「私は何一つ欠けることなく、安心してそこを歩く。なぜならヤハウェが私と一緒に歩いてくれるから」という詩です。有名な詩編第23編「ヤハウェは私の牧者」詩編です。ヤハウェでなくても神様でなくてもいい。ある思想、はっきりした状況認識をもって、自分で考えるだけの力をもって死の影の谷を歩くか、ただ漠然と歩いているか、によって全ては変わると思います。

人間のいい部分という言い方ですけれども、これがいいあれがいいというよりは「ことば」をもつということに尽きると思いますね。そして皆さん、この頃は本なんかどうでもいいやという感じかもしれませんが、人間が本を簡単に手にできるようになるまでには、5000年の歴史がかかったのです。5000年前に字を発明した。別に俳句をひねりたいからでも何でもない。そこまで生命が始まって何百万年たったか知りませんが、社会構造が熟してきて記録を取らざるを得ないところまできた。それで字を書くということがほとんど自然発生的にメソポタミアとエジプトで、恐らくメソポタミアのペルシャ湾岸のシュメールという国で最初に起こったと思いますが、直ちにエジプトに伝播し、記録を取るようになった。記録を取るというのは、一気に過去と未来が自分の手に入るということですね。それは人間のいいところというか、人間の人間らしい力です。

ですから、ことばはくれぐれも大事になさってください。どんなことばでしゃべり散らしてもいいわけではありません。皆さんのように、勉強していればいいという身分、アルバイトしている方もいるかもしれませんが、勉強すればいいというのが学生の身分ですから、その間にぜひ自分で書けて、そして、語れるちゃんとしたことばを、自分で集め

るということを、ぜひ頭に入れておいてください。自動的にできることではありません。

へんなことばを使いへんな音楽を聴き変なものを見ていると、それは人間の中に入り込んで、あるときそれがその人に暴力を振るいます。できるだけ肯定的なものを自分の中に取り込むべく、いささかなりとも努力なさってください。こういうことを話し合えるというのが人間のいいところです。

●司会：ありがとうございます。

(了)